欲求不満場面における子どもの役割期待に関する研究

——特にP-Fスタディ母—子場面について——

藤　田　主　一

問　　題

Rosenzweigが創始したP－Fスタディ（Picture-Frustration Study）は，心理学的なパーソナリティ・テストの中の投影法（projective method）に属している。投影法は，被検者に比較的あいまいな絵や図形，文章などの刺激材料を与え，それに対する被検者の自由な反応からその人のパーソナリティ像を把握する方法である。ここでの理論的仮説は，人間はある場面（その人のパーソナリティが問われるような何らかの解決課題が与えられている）に置かれると，そこに示された外的刺激に対して無意識的に自己の内面を投影し意味づけるというものである。

P－Fスタディは，ロールシャッハ・テスト（Rorschach Test）やTAT（Thematic Apperception Test）と並んで投影法の代表的なテストの一つであるが，それはRosenzweigが自身の欲求不満理論を検証するために考案したので，テストとしての理論的背景と構成に特徴が認められる。彼の理論の基本は，いわゆる個性的事象界（idioverse）と呼ばれる自我の独自性や力動性を主観的な反応から捉えることで，人間のパーソナリティを理解する立場であったといえる。その際に問題になるのは，この主観的な反応を客観的なベースに置き換える指標である。P－Fスタディは，Rosenzweigのこうした考え方を基本にして構成されたのである。

さて，P－Fスタディには日常生活場面においてごく普通に経験される24種類の軽い欲求不満場面が選択されていて，被検者の主観的な反応からその人の力動的なパーソナリティが探られるように工夫されている。P－Fスタディは広く臨床的に使用され，同時にパーソナリティ理解の用具としての有効性を高めているが，２つの刺激材料つまり漫画風の絵画刺激と左側人物の言語刺激が外的に与えられていることから，かなり場面ごとの状況決定因（situational determinant）が強く，そのために反応の自由度が低くなることも事実である。

P－Fスタディの各場面に対する反応は，アグレッションの方向（Directions of Aggression）とアグレッションの型（Types of Aggression）という２次元のカテゴリーに分類される。さら

にアグレッションの方向は他責的（Extraggression, E－A），自責的（Intraggression, I－A），無責的（Imaggression, M－A）の3方向に，アグレッションの型は障害優位（Obstacle-Dominance, O－D），自我防衛（Ego-Defence, E－D），要求固執（Need-Persistence, N－P）の3型に分類される。これらの相互の組合せにより基本的に9種類の評点因子（Scoring factors）の成立が可能であり，24場面を通しての評点因子の出現頻度ならびにその特徴や反応転移などの推移から，その人のパーソナリティを浮き彫りにすることで，主観的反応を客観的で科学的な標準へと導くのである。

ところで，近年P－Fスタディ研究に従来にも増して新たな展開が認められるようになった。それはより深いパーソナリティ理解の追究を目的にして，従来の標準法に依拠する以外に新たな手続きを加えようとするものである。これに関して，高橋・藤田（1985）は場面展開性（紙上ロールプレイング role playing とほぼ同義）という観点から標準法以外の施行方法を検討している。それは，P－Fスタディの1場面に対して4こまの場面を展開せよという枠組を与えてお話を作らせることにより，対話内容がどのように展開されて行くのかを明らかにしようとしたものである。具体的には，1場面を4こまに分けて横に並べ，2こま目からは登場人物の言い出しの部分を両者とも空欄にした場面設定を与え，その展開過程と終結結果から被検者のパーソナリティの力動的な側面を捉える方法である。詳細な内容は別の機会に発表するが，筆者らのこれまでの研究では，標準法では予想し得ない日常の行動様式や対人場面における他者認知，さらに両者の役割期待などが生き生きと再現されるとともに，欲求不満に対する被検者の解決展開の方向性が見い出され，臨床的にも意味のある知見が示されたのである。

これに類似した研究は阿部（1987）によっても行われている。そこでは，日常の親子間で交わされる会話（主としてトラブルの原因になるもの）が設定されていて，その会話を3回続けて展開させたのである。得られた結果から，親子間のコミュニケーションのトラブルは単なる言語表明の行違いに留まらず，両者の感情の相互理解が十分でないためと結論づけられたのである。

筆者らのこのような研究の背景は，特にP－Fスタディの刺激構造や場面特性をはじめとする多数の優れた研究成果（秦1987に詳しい）に負っている。また，藤田・高橋（1984）の指摘にもあるように，1場面1反応ではいわゆる意見水準（opinion level）を表明したり，安易にその場限りの反応をしてしまう被検者の心理状態に関心が向けられたからである。思わぬ欲求不満事態という外的要請を受けて，幾分戸惑いながらも解決のために豊富な対応の仕方をまとめなければならないため，被検者によってはその場を回避したい衝動から安易な回答をしてしまうことも無理からぬところであろう。実際，真の内的照準に合致した反応をせずに，期待水準に沿った常識的な対処の仕方をしてしまうことのあるのも納得される。即ち，それは反応に先行して熟考した事柄をそのまま記述する場合のほかに，反応を抑制して敢えて表出しない場合の存在を意味するものである。さらに別の角度から見れば，被検者自身が考えもつかない内容や実験者側の操作に

よって意識化される内容も存在することと思われたのである。

先の藤田・高橋（1984）は，このような被検者に内在する多様な反応傾向を分析する目的で，児童用マニアル評点例に記載されている例文を右側人物の応答言語にして，それを子どもの反応として同意するか否かをＧＣＲ（Group Conformity Rating）項目12場面について評定させた。その結果から，標準法では同一評点と見なされる応答言語に対しても選択率が異なったり，また一般にＧＣＲ％には算入されない評点因子が高い選択を受けている点など，被検者の外見水準ではつかみ切れない反応の多様性が確かめられている。

これまでに示した研究方向に加えて，場面認知の相違による反応水準の効果を研究することは，大変重要な課題である。所与の欲求不満事態と現実経験との類似性はその反応に影響を与えるだろうし，欲求不満を生起させた左側人物を誰と認知したかによっても反応の意味は異なってくる。Ｐ－Ｆスタディに絵画刺激（言語刺激を含めて）として登場する２人の人物の人間関係の認知は，確かに反応する場合の手がかり要素を多く持っている。人間は誕生から現在まで，その時々において実にさまざまな地位を占めているのは言うまでもないことである。親であっても子どもであっても，それは例外でない。彼らは，それぞれの地位や役割に応じた行動や態度を求められることが多く，反対に制限や禁止を受けることも顕著である。そこで，Ｐ－Ｆスタディと家族関係を扱った研究を２，３振り返ってみよう。

久芳（1959）は，Morgan が考案した罰場面指数（The Punishment Situation Index; PSI）によって母親―子ども関係を罰の方面から研究するために，Ｐ－Ｆスタディの処理方法（アグレッションの方向と型）を用いて検討した。被検者は小学校４～６年生およびその母親の各４０名である。その結果，母親―子ども間における罰場面を攻撃（アグレッション）の方面から把握するには，投影法的方法では不十分としながらも，いくつかの興味深い点が指摘された。それらは，以下のようにまとめられるだろう。

(1)　母親は子どもが母親に向けるよりも，子どもに対してより多くの攻撃的方向（他責的）をとる。

(2)　母親についての子どもの考え方は，母親自身についての考え方よりもより攻撃的方向をとる。そして，子どもは母親以上に罰に対して敏感である。

(3)　母親は子どもよりもＯ－Ｄ（障害優位），Ｎ－Ｐ（要求固執）の型が多く，子どもは母親よりもＥ－Ｄ（自我防衛）の型が多い。

(4)　多くの母親は全般的に要求阻止の立場にあり，子どもの行動を否定することが多い。

先の阿部（1987）の研究は，この罰場面の考え方を発展させたものかもしれない。

秦（1974）は，Ｐ－Ｆスタディ児童用を小学校３年生，６年生，中学校３年生の計232名に集団で実施し，標準法での記入が終了した後に，場面ごとに左側人物と右側人物との関係を再記入させた。その結果，全体的に見て比較的人物認知の一致率の高い場面と人物認知の異なる場面と

が混在した。さらに，相手（左側人物）を家族と認知する場合は，相手を他人と認知する場合よりも他責的反応を示し易いことを指摘し，評点や解釈をする時には人物認知と言語反応とを比較しながら検討する必要性を強調している。それは，原野・江川・渡辺（1970）による研究でも確認されていた。親や一般人が欲求不満の原因になる時は，教師が原因になる時よりもはるかに他責的態度を示すことが明らかにされたのである。

伊藤（1979）は，子どもの反応とそれについての母親の予測反応を，小学校４年生の男女とその母親の計41組に求めた。それによると，アグレッションの方向で抽出された相互の反応（子どもがある方向の反応をした時，それと一致する評点の予測反応が母親によってなされる）を指標にした場合では，子どもの性別に関わりなく平均60％前後で一致していたのである。これらのことから，母親の予測反応の特徴は子どもが現実の欲求不満場面で示す反応を反映するものと考えられた。

最後に，藤田（1986）の研究を検討してみよう。そこでは，母親の眼を通しての子ども像，子どもの欲求不満に対する対応方法や，あるいはまた子どもに何を期待し何を期待しないのかといった役割期待の方向差，加えて日常の母―子関係の具体像をＰ－Ｆスタディの場面を通して明らかにするのが目的であった。被検者は小学生を持つ母親81名である。材料に用いられたのは，Ｐ－Ｆスタディ児童用から母―子の対話場面と想定された10場面である。子どもの反応を３つの水準で記入する教示が与えられた。すなわち，一般的反応水準，母親が期待する反応水準，母親が期待しない反応水準である。その結果，概ね次の諸点が明らかになった。

(1) 特定の評点因子が，３反応水準ともに出現しない場面が認められた。

(2) 特定の評点カテゴリー（Scoring Categories）が，３反応水準ともに出現しない場面が認められた。

(3) 理論上は同一評点に分類されるが，３反応水準に分かれる反応語が認められた。

(4) 欲求不満事態では，子どもは必ずしも言語反応をするとは限らない事実が認められた。

これらの諸結果から解釈される母親の役割期待の水準において，概して母親が期待する（好まれる）方向は自責的（Ｉ－Ａ）あるいは無責的（Ｍ－Ａ）な反応であり，反対に，母親が期待しない（好まれない）方向は他責的（Ｅ－Ａ）な反応であることが明らかになったのである。

本研究は，これらの知見を踏まえて母親に対する子どもの認知像を，期待水準の２方向に求めた。これはＣＣＰ（A Test for Measuring Children's Cognition of Parents）による親子関係理解の目的をＰ－Ｆスタディの場面を通して検討するとともに，子ども自身がどのような役割期待を自認しているかを知ろうとするものである。つまり，子ども自身を主体に，①母親は子どものどんな反応を期待していると思うか，②母親が期待していない反応とはどのようなものと思うか，を問題にした。回答内容は標準法に照らして評点を試み，可能な限り母親自身による期待水準の結果との比較を検討して，相互の役割を明らかにすることを目的とするものである。

方　　法

1.　被検者

被検者は，神奈川県藤沢市内の公立K小学校6年生の男女計64名である。検査実施時の平均年齢は11.63歳（11歳2ヵ月～12歳2ヵ月）であった。

2.　検査材料

本研究で用いた検査材料は，P－Fスタディ児童用24場面の中から，絵画刺激と言語刺激の内容および従来の研究報告を考慮して選択された母―子の対話場面と想定される10場面である。最終的にこの10場面を選択する過程で，秦（1974）の研究などを参考にしている。そこでは，全24場面について左側人物は右側人物から見てどのような関係になるか（父，母，先生，友人など）を出現率の上から検討された。今，試みに全24場面を欲求不満に陥れる人（欲求阻止者：Frustrater）と欲求不満に陥れられる人（被欲求阻止者：Frustratee）に分けて示すと，おおよそ**表1**のようなパターンになるだろう。

本研究の対象になるP－Fスタディ母―子場面とその言語刺激は以下の通りである。

場面1　「お菓子は兄さんにあげたから，もう1つもありませんよ。」

表1　欲求阻止者の年齢水準・性別と，被欲求阻止者の性別による P-Fスタディ児童用場面の分類

欲求阻止者 左側人物：Frustrater		被欲求阻止者 右側人物：Frustratee	
年齢水準	性別	男　子	女　子
成　人（年配者）	男　子	11　13	5
成　人（年配者）	女　子	④　⑩　⑭　⑮　⑰ ⑲　22　㉓　24	①　⑦　⑯
仲　間（同年齢者）	男　子	6　9　12　20	3
仲　間（同年齢者）	女　子	2　18	8　21

注　1）　表中の数字は児童用場面の場面番号である。また，○印がついている数字は，本研究で用いられる場面をさしている。

注　2）　年齢水準は，右側人物と比較してのものである。

注　3）　場面6は，左側人物の年齢水準に対して「年上の子」「友人」といった人物認知が高率を占めていることから成人とは考えにくいので「仲間」として分類した。

注　4）　場面11は，左側人物を「父」「兄」とする人物認知が高率を占めていることから「成人・男子」として分類した。

注　5）　場面17は，人物認知を「両親」とするのが一般的だが，言語刺激の内容を検討した結果「成人・女子→母」として分類した。

場面４　「困ったわね。その自動車私には直せないわ。」

場面７　「あなたは悪い子ね。うちの花を摘んだりして。」

場面10　「悪いことをした罰に，押入れに入れて悪かったね。」

場面14　「そんなところに隠れて，何をしているの。」

場面15　「けがはしなかったかい。」

場面16　「あなたのボールを取ったりして，この小さい子はいけないわね。」

場面17　「出かけるから，寝て留守番していてね。」

場面19　「また寝小便したのね。小さい弟よりだめじゃないの。」

場面23　「おつゆが冷めてしまって悪かったわね。」

上記10場面のうち，場面１，場面４，場面10，場面15，場面16，場面17，場面23は自我阻害場面（Ego-Blocking Situation）で，残りの場面７，場面14，場面19は超自我阻害場面（Superego-Blocking Situation）である。また，場面７，場面10，場面16，場面17，場面19には社会的適応性を見るＧＣＲ評点が設定されている。

3.　手続き

検査は小集団で実施し，その基本的な手続きは通常の標準法に準拠しているが，記入に際してここでは母親の期待水準の検査方法に習い，特に２種類――①母親が期待する答え，②母親が期待しない答え――の回答欄を設け，子ども自身に率直な回答を求めた。具体的な教示の概略は次の通りで，例題を用いて説明された。

左の絵を見てください。「あなたの書いた絵あまりじょうずではないね。」と母親が子どもに話しかけているところです。これはお母さんと子どものお話です。さあ，子どもは何か答えなければなりません。その時，お母さんが期待する（お母さんが喜んだり，誉めてくれたりする）答えは何ですか。その言葉を①の欄に書いてください。それではお母さんが期待しない（お母さんが怒ったり，お母さんに叱られたりする）答えは何ですか。その言葉を②の欄に書いてください。思いつくままでよいですから自由に書いてください。

教示終了後，場面１から順次記述を求めたが，回収後に１人ひとりの反応内容を調べたところ，あいまいな反応語や誤認ならびに無応答が見られたので，その場合は個別に呼び出して誘導しない程度に再度の確認と記述を求めた。

結果と考察

子どもから得られた母親が期待する反応水準，期待しない反応水準の記述内容は，Ｐ－Ｆスタディ児童用日本版（住田・林・一谷1964，住田・林・一谷ほか1987）に依拠して評点ならびに解

釈が行なわれた。なお，ここでは全被検者の評点因子と評点カテゴリーの出現率を場面ごとに算出した。また，いわゆる不明確語等については，本研究では上述のごとく慎重に対処したために認められていない。以下，場面ごとの２水準の評点結果を中心に特徴的な諸点について考察する。

1.　母―子全10場面の反応傾向について

表２は，母―子の全10場面における評点因子の出現率を，期待する反応水準（期待水準）と期待しない反応水準（非期待水準）ごとに，また，**表３**は評点カテゴリー別の出現率を同じく示したものである。なお，**図１**および**図２**はそれらの一部を視覚的に図示したものである。

表２　全10場面における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待する反応水準	期待しない反応水準	有意差
E′	1.80	15.31	＊＊
E（E）	0.47	48.60	＊＊
e	2.27	27.73	＊＊
I′	11.80	0.78	＊＊
I（I）	18.36	2.74	＊＊
i	13.67	0.47	＊＊
M′	16.25	3.36	＊＊
M	20.55	0.31	＊＊
m	14.83	0.70	＊＊

＊＊　$P<.01$

表３　全10場面における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待する反応水準	期待しない反応水準	有意差
E－A%	4.54	91.64	＊＊
I－A%	43.83	3.99	＊＊
M－A%	51.63	4.37	＊＊
O－D%	29.85	19.45	＊＊
E－D%	39.38	51.65	＊＊
N－P%	30.77	28.90	
E%	0.31	1.72	＊
I%	4.77	2.19	＊
E＋I%	5.08	3.91	
E－E%	0.16	46.88	＊＊
I－I%	13.59	0.55	＊＊
(M－A)＋I%	25.32	2.50	＊＊

＊　$P<.05$,　＊＊　$P<.01$

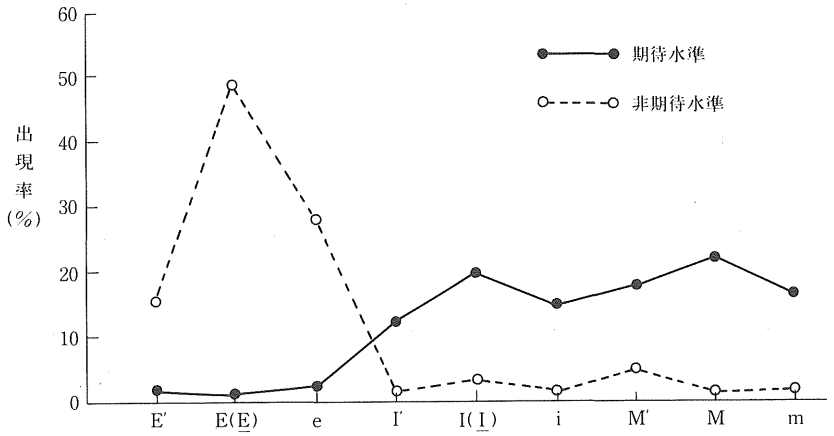

図１　全10場面における評点因子の出現率

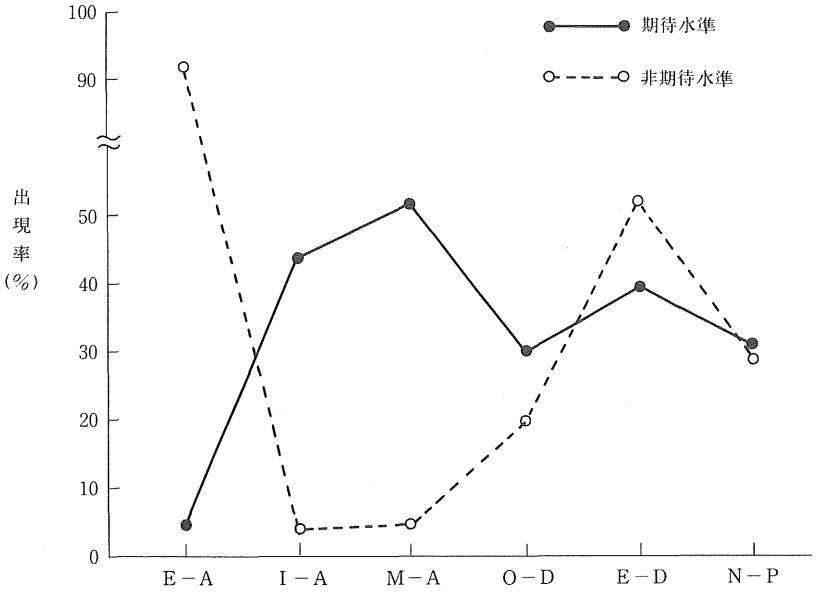

図２　全10場面における評点カテゴリーの出現率

表２，表３からも理解される通り，全体的に見て子ども自身が自認する母親の期待水準は，アグレッションの方向では有意に無責的（M－A％）で自責的（I－A％）である。無責的反応は子どもを欲求不満に陥れた時に母親を許容したり，忍耐したり規則や習慣に従う反応であるから，子ども自身が母親の期待をそういう種類のものと認識し，自らの役割を確認している結果と言える。自責的反応が欲求不満の原因を自分の責任に帰する反応であると考えれば，子どもは謝罪やそれを基準にした努力という形で将来への決意を求める，いわば理想的な子ども像を思う母親を描いていることになる。自罰反応Ｉや自責固執反応ｉの比率はこれを物語り，一方的に与えられた欲求不満の解決場面を，自己非難や自己反省を演じて切り抜けることが，自分に対する母親の期待と合致すると解釈しているのであろう。さらに，（M－A）＋Ｉ％が有意に高率な結果は，それが他者や自己を弁護する傾向であることから，社会的に成熟していたり精神的に発達している姿の追求を，母親の今一つの子ども自身への要請と見ていることを示している。

これに対して，全体的に見た子どもが自認する母親が期待しない反応水準（非期待水準）はどのような傾向であろうか。まず第一に把握できる大きな特徴は，アグレッションの方向で他責的（E－A％）反応が全体の９割以上を占め，期待水準の反応と歴然とした相違を表出している点である。他責的反応は欲求不満の原因を他者（ここでは主として母親）や周辺環境に求めるものであるから，子どもは仮に自分が母親などに対してそうした言動を行なうとすると，それが母親の最大にして最高の期待と掛け離れた反応であることを十分に承知しているのである。アグレッ

ションの方向と型をクロスして見ると，自我防衛型（E－D％）が有意に高率である結果は，すなわち他罰反応Eの高さを裏付けるものである。さらにこれも特徴的と思われるが，他責固執反応eのような母親などに対する解決要求も決っして望ましい方法と考えていないのである。いずれにしても，期待，非期待の反応水準は全体傾向としてかなり極端な二極分化の様相を示唆するものである。

2.　母―子各場面の反応傾向について

次に，それぞれの母―子場面について検討してみよう。

場面1

場面1は自我阻害場面で，子どもが母親から一方的に「お菓子は兄さんにあげてしまった」ことを言い渡される場面である。**表4**は期待水準と非期待水準に関する評点因子の出現率を，**表5**は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。子どもは欲求不満に陥れられた状況を解決していく際に，母親として描かれた左側人物に対してさまざまな思いを言葉を通して投影するに違いない。特に場面1は全検査の第1図版ということでもあり，かなり重要な位置を占めるとともに大きな手掛りを与えてくれるものと思われる。

表4　場面1における評点因子の出現率

（％）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	2.3	13.3	*
E	0	50.0	**
e	0	32.8	**
I′	0	0	
I	0	0	
i	6.3	1.6	
M′	14.1	0	**
M	35.9	0	**
m	41.4	2.3	**

*　$P<.05$,　**　$P<.01$

表5　場面1における評点カテゴリーの出現率（％）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A％	2.3	96.1	**
I－A％	6.3	1.6	
M－A％	91.4	2.3	**
O－D％	16.4	13.3	
E－D％	35.9	50.0	
N－P％	47.7	36.7	

**　$P<.01$

子どもは母親が期待するとの認識を持つ反応水準として，評点因子別では無責的方向，特に時間的な経過や社会的規範に従うとされる無責固執反応mを出現しやすい。このm反応の中でも「我慢する」「今度はとっておいてね」の応答を母親の期待と考えている。ただ，m反応の出現比率について言えば，母親自身が期待する水準よりかなり低い。それに代わり無罰反応Mが高かったのである。つまり「それならいいですよ，お母さん」といったように，母親の言動を許容する方向が母親の好きな態度と考える。そこに幾分かのズレがあり，子どもは母親を許し，母親は「我慢する子」が現実像らしい。母親自身の期待水準に見られた「ほかのものを頂戴」といったe反応とm反応の組合せ評点はなかった。また，自責的方向がほとんど出現しないのも特徴のひ

とつであった。

子どもが認める母親が期待しない反応は，欲求不満を強調する他責逡巡反応E′のほかに，母親の不平等な扱いに「兄さんばっかりずるいよ」「どうして残してくれなかったのよ」「母さんのバカ」と非難・攻撃する他罰反応E，「私のも買ってきてよ」といった欲求不満事態を母親の行動により解決しようとする他責固執反応eに出現する。これらの傾向は母親自身の非期待水準と類似であるが，e反応が子どもに高いことを考え合せると，母親自身は自分が攻撃されることに敏感だが，子どもはそれとともに解決を相手に強要することを母親は好ましく思わないと考えている。このように，場面1では子どもから見た母親の期待水準は無責方向であり，通常の対話状態で表明しやすい他責方向は決っして期待されるべきものではない事実を理解している。

場面4

場面4は自我阻害場面で，子どもが母親から「私には自動車が直せない」と困惑を示される場面である。**表6**は評点因子の出現率を，**表7**は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。子どもが認める母親が期待する反応水準は，無責的方向と要求固執型にその半数以上が出現する。具体的には「いいのよ，お母さん」と母親の力量を許すM反応，「じゃあ，我慢してほかので遊ぶ」といったm反応，「何とか自分で直してみる」という自発的な努力によって欲求不満を解決しようとする自責固執反応iなどである。母親自身の期待水準が大きくe反応とi反応に分離していたのに対し，子どもの場合は比較的その値が低いのが特徴である。母親は誰か（特に父親）に依存したり子どもの自発的努力に期待をかけるが，子ども自身は許容や他者に依存しない態度を望むと考えている。

一方，子どもが認める母親が期待しない反応水準は，e反応とE反応で全体の9割以上を占める。e反応は，評点上は同一に判断されるが「今すぐ直してよ」「新しいの買って」「お父さんに直してもらおう」という対応の異なる3水準にはっきりと分かれている。母親の力量を非難・攻

表6　場面4における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	0	3.1	
E	0	31.3	＊＊
e	16.4	62.5	＊＊
I′	0	0	
I	0	0	
i	18.0	3.1	＊＊
M′	0	0	
M	39.8	0	＊＊
m	25.8	0	＊＊

＊＊　$P<.01$

表7　場面4における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A%	16.4	96.9	＊＊
I－A%	18.0	3.1	＊＊
M－A%	65.6	0	＊＊
O－D%	0	3.1	
E－D%	39.8	31.3	
N－P%	60.2	65.6	

＊＊　$P<.01$

撃するE反応は，たとえば「お母さんは頭が悪いわね」「ダメなお母さん」のように，母親自身の自我が傷つけられる言動や，子どもからその非難や攻撃を受けるのではないかという不安への防衛を，子どもが確かに承知していると解釈できる。母親自身の非期待水準では「捨てる」についての反応を嫌っていたが，子どもの母親像にはそれがなく，両親への依頼や新品の要求を母親は望まないと考えているのである。

場面7

場面7は超自我阻害場面で，子どもが母親から「家の花を摘んだ」ことを叱られている場面である。**表8**は評点因子の出現率を，**表9**は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対処する解決行動として，子どもが認める母親の期待水準はI－A％にほとんどが集中する自責的方向である。それは自罰反応I以上に，弁明的な言い訳を付加して自我を弁解する超自我因子$\underline{\mathrm{I}}$反応である。つまり「これからはもうしません」という徹底した償いやその目標への努力を意味するi反応に留まらず，その前段階とも言える率直な謝罪と自己弁明なのである。これは母親自身の結果と同傾向であった。

表8　場面7における評点因子の出現率

（％）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	0	0	
E	0	60.9	＊＊
e	1.6	25.0	＊＊
I′	4.7	0	
I	75.7	14.1	＊＊
i	18.0	0	＊＊
M′	0	0	
M	0	0	
m	0	0	
$\underline{\mathrm{E}}$	0	4.7	
$\underline{\mathrm{I}}$	42.9	14.1	＊＊
$\underline{\mathrm{E}}+\underline{\mathrm{I}}$	42.9	18.8	＊＊
$\mathrm{E}-\underline{\mathrm{E}}$	0	56.2	＊＊
$\mathrm{I}-\underline{\mathrm{I}}$	32.8	0	＊＊
$(\mathrm{M}-\mathrm{A})+\underline{\mathrm{I}}$	42.9	14.1	＊＊

＊＊　$P<.01$

表9　場面7における評点カテゴリーの出現率（％）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A％	1.6	85.9	＊＊
I－A％	98.4	14.1	＊＊
M－A％	0	0	
O－D％	4.7	0	
E－D％	75.7	75.0	
N－P％	19.6	25.0	

＊＊　$P<.01$

一方，子どもが認める母親が期待しない反応水準は，自分の行為を否定したり母親に反発したりする他罰反応で，それを好ましくないものと感じている。ただここで興味深いことは，子どもが超自我の非難を受容できず「だって――だから」という形で一応の言い訳をする反応が，母親によってそれほど否定されているのではない点である。これは期待水準に高出現率な事実からも

理解でき，「きれいだから部屋にかざる」「お母さんにプレゼントしようと思う」といった反応語は，外見上は自己弁明の言い訳であっても，母親に女子らしい役割と思われることへの期待を込めているのである。

場面10

場面10は自我阻害場面で，母親が子どもに「悪いことをした罰に押入れに入れた」ことを詫びている場面である。**表10**は評点因子の出現率を，**表11**は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する解決行動として，子どもが認める母親が期待する反応水準はＩ反応とｉ反応の自責的方向で大部分を説明できる。すなわち，Ｉ反応は「ごめんなさい」「僕が悪かったんだ，ごめんなさい」を意味し，ｉ反応は「今度はもうしません」「もう悪いことはしません」を意味しており，子どもの無意図的で理屈のない謝罪と将来への約束を求めるものである。これは母親自身の水準と類似傾向にあり，母親の役割期待と子どもの被役割期待に相当分の合致を示すものと言える。

表10　場面10における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	1.6	18.8	＊＊
E	0	70.2	＊＊
e	0	6.3	＊
I′	1.6	3.9	
I	64.7	0.8	＊＊
i	21.1	0	＊＊
M′	4.7	0	
M	6.3	0	＊
m	0	0	

＊ $P<.05$,　＊＊ $P<.01$

表11　場面10における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A%	1.6	95.3	＊＊
I－A%	87.4	4.7	＊＊
M－A%	11.0	0	＊＊
O－D%	7.9	22.7	＊
E－D%	71.0	71.0	
N－P%	21.1	6.3	＊

＊ $P<.05$,　＊＊ $P<.01$

一方，子どもが認める母親の非期待水準は圧倒的に他責的方向である。すなわち，母親を直接に非難・攻撃して「それじゃあ，入れなければいいじゃないか」「お母さんなんて嫌いよ」というＥ反応，自分が欲求不満に陥ったことを強調して「暗くてこわかった」「お母さんこわかった」というＥ′反応である。後者の他責逡巡反応は，子どもの側に高い。おそらく，この種の応答が母親には他罰反応（母親へ向けられた非難）と同様に受け取られるのではないか，という子どもの現実認知から派生したものと思われる。場面10で母親自身の非期待水準と相違した点は，母親が話しかけているのに対して「黙っている」「何も言わない」のように子どもが無言の状態でいたり，泣いたりふくれっ面をして言葉に出さない日常経験の記述が全く存在しなかったことである。この状態を母親は決っして望ましい子どもの態度と考えていないが，子どもが母―子関係の中で叱責に値すると認識しているのは，どうも言語反応に対する母親からの評価のようである。

場面14

場面14は超自我阻害場面で，子どもが母親から「隠れている理由」を問い詰められている場面である。**表12**は評点因子の出現率を，**表13**は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。子どもが認める母親の期待水準の結果は，表からも明らかなように，無責的方向で障害優位型である。それは「うん，ちょっと」「かくれんぼしている」「遊んでいる」という罪の是認や否定には関係のない単なる状況説明の無責逡巡反応M′である。すなわち，子どもは「自分が――をしている」といった応答であれば母親はそれを容認すると考えており，これは母親自身の見方よりもかなり高率である。さらに言えば，母親自身は罰の肯定（自罰反応）を望んでいたが，子どもの捉え方はそれが皆無に近かった。

表12　場面14における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	9.4	0	*
E	1.6	68.8	**
e	0	0	
I′	0	0	
I	3.1	2.3	
i	0	0	
M′	85.9	28.9	**
M	0	0	
m	0	0	
E̲	1.6	0.8	
I̲	0	0	
E̲＋I̲	1.6	0.8	
E－E̲	1.6	68.0	**
I－I̲	3.1	2.3	
(M－A)＋I̲	85.9	28.9	**

* $P<.05$,　** $P<.01$

表13　場面14における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A%	11.0	68.8	**
I－A%	3.1	2.3	
M－A%	85.9	28.9	**
O－D%	95.3	28.9	**
E－D%	4.7	71.1	**
N－P%	0	0	

** $P<.01$

一方，子どもが認める母親の非期待水準は他責方向，主として「僕の勝手でしょ」「何だっていいでしょう」「うるさい」といった拒否や攻撃を示す他罰反応E，「寝ていた」「ふすまに絵を書いていた」のようなM′反応に見られる。同じくM′反応が非期待水準に表出されるのは，実際に子どもの言語記述を調べていくと「――している」行為の違いによると理解できる。超自我因子のE̲反応を含めたE反応は母親自身のものと同等比率であるが，子どもに映る母親像に自己否定のE̲反応がほとんどゼロに近いのも特徴的である。

場面15

場面15は自我阻害場面で，子どもの「けがの状態」を母親が尋ねている場面である。**表14**は評

表14　場面15における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	1.6	16.4	＊＊
E	0	54.7	＊＊
e	0	20.3	＊＊
I′	93.0	3.9	＊＊
I	2.3	1.6	
i	0	0	
M′	3.1	0	
M	0	3.1	
m	0	0	

＊＊　$P<.01$

表15　場面15における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A%	1.6	91.4	＊＊
I－A%	95.3	5.5	＊＊
M－A%	3.1	3.1	＊＊
O－D%	97.7	20.3	＊＊
E－D%	2.3	59.4	
N－P%	0	20.3	＊＊

＊＊　$P<.01$

点因子の出現率を，表15は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。この場面も欲求不満に対する解決行動として，期待・非期待の両水準に差違が存在する。子どもが認める母親の期待水準は，圧倒的に自責的で障害優位型である。これは母親の心配を緩和する意味を含んで「大丈夫だよ」「平気，平気」と，欲求不満状況やけがをしたことを否定するI′反応である。子どもは母親が自分の無事を願う気持を理解していると見てよいだろう。I′反応に集中することから，母親自身の期待水準に認められた「痛い」とけがの事実と程度を強調するE′反応，自分の不注意を肯定するI反応などはほとんど出現せず，これは応答時に何らかの防衛が働いたのかも知れない。

一方，子どもが認める母親の非期待水準はE反応，e反応，E′反応の順にその大部分が他責的反応で占められている。つまり「お母さんが悪いんだ」「もう痛いよー」「早く助けてよ」という一連の応答進行に結びつく内容である。子どもは，母親の不手際を非難・攻撃すれば，それが母親に好まれない方向に進んでしまうことを十分に承知している。ただ，これも比較の立場になるが，母親自身E′反応のように単に「痛い」と強調するのみを嫌うが，子どもは母親以上には強調反応を期待されていないとは意識していないようである。

場面16

場面16は自我阻害場面で，母親が「ボールをとった小さい子ども」を非難している場面である。表16は評点因子の出現率を，表17は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する対処行動として，子どもが認める母親の期待水準は無責的方向であり，主として自我防衛型である。無責的方向の中でも「まだ小さいからいいよ」「私が貸してあげたの」のように，ボールをとった小さい子どもを小さいから分からなかったのだと明らかに許容する，いわば常識的反応ともとれる無罰反応Mが大半である。母親が好ましいと考えるM反応や，あるいはM′反応が比較的高比率なのは，所与の欲求不満事態を全く不可避的な状況と見

表16　場面16における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	2.3	53.1	＊＊
E	0.8	9.4	＊
e	0	32.8	＊＊
I′	0	0	
I	1.6	0	
i	1.6	0	
M′	15.6	4.7	＊
M	76.5	0	＊＊
m	1.6	0	

＊ $P<.05$,　＊＊ $P<.01$

表17　場面16における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A%	3.1	95.3	＊＊
I－A%	3.2	0	
M－A%	93.7	4.7	＊＊
O－D%	17.9	57.8	＊＊
E－D%	78.9	9.4	＊＊
N－P%	3.2	32.8	＊＊

＊＊ $P<.01$

なして，小さい子どもを許容する“思いやり”の気持を子ども自身が母親の中に投影しているからなのである。

一方，子どもが認める母親の非期待水準はE′反応，e反応，E反応で全体の9割以上を占める。この場面も圧倒的に他責的方向である。つまり，E′反応は「その子がとった」「そうよ，この子よ」，e反応は「早く返してよ」「返すように言ってよ」であり，E反応は「叱るのがお母さんの仕事だ」といった内容である。子どもは欲求不満を自分以外の対象（母親や小さい子ども）に固定して攻撃することにより，自我を防衛したり防衛の手段を求めたりするのであるが，同時にそれが母親には望まれない方法であることも了解していると考えられる。今ひとつ興味深い点は，母親自身もまた子どもの母親像も，共に自責的方向の役割を全く認めていないことである。

場面17

場面17は自我阻害場面で，子どもが「留守番」を母親から要請される場面である。表18は評点因子の出現率を，表19は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。

表18　場面17における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	0.8	32.8	＊＊
E	0	18.8	＊＊
e	4.7	43.7	＊＊
I′	0	0	
I	0	0	
i	0	0	
M′	0	0	
M	21.9	0	＊＊
m	72.6	4.7	＊＊

＊＊ $P<.01$

表19　場面17における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A%	5.5	95.3	＊＊
I－A%	0	0	
M－A%	94.5	4.7	＊＊
O－D%	0.8	32.8	＊＊
E－D%	21.9	18.8	
N－P%	77.3	48.4	＊＊

＊＊ $P<.01$

欲求不満場面に対する子どもから見た母親の期待水準は，無責的方向に集中し要求固執型に高率の傾向を持つ。すなわち無責的方向は「うん，わかった」「うん，我慢して待っているから平気」に代表されるm反応で，要求固執型の9割を占めている。e反応は他責方向であるため単独での出現は1例もなく，すべて「早く帰って来て」「おみやげ買って来て」に見られるm反応との組合せによるe反応である。ただし，この組合せ評点はごくわずかである。子どもは母親の要求（留守番）に素直に従うこと，母親には解決を要求しないことが母親の好む態度であると考えている。それは，母親達2人の行動をこれも従順に認めるM反応の出現からも裏付けられると思われる。

一方，子どもが認める母親の非期待水準は，e反応，E′反応，E反応という他責的方向である。子どもを置いて行く母親に対して，「私も行きたい」「行かないでよ」というe反応，「えっ」「いやだなあ」というE′反応，「お母さんばかりずるい」というE反応に見られるように，母親を非難したり特別な何かを要求すると，それは母親の意志や命令に素直に従わない，どちらかと言えば我がままな態度であるとの批判が，子どもの眼に映る母親像として理解されるのである。母親と子どもの役割が見事に描かれている。

場面19

場面19は超自我阻害場面で，「寝小便」をした子どもが弟と比較されて母親から叱られている場面である。**表20**は評点因子の出現率を，**表21**は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する解決行動として，子どもから見た母親が期待する反

表20　場面19における評点因子の出現率

（%）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	0	0	
E	1.6	88.3	＊＊
e	0	3.1	
I′	0	0	
I	32.8	8.6	＊＊
i	65.6	0	＊＊
M′	0	0	
M	0	0	
m	0	0	
$\underline{E}$	1.6	11.7	＊
$\underline{I}$	4.7	7.8	
$\underline{E}+\underline{I}$	6.3	19.5	＊
$E-\underline{E}$	0	76.6	＊＊
$I-\underline{I}$	28.1	0.8	＊＊
$(M-A)+\underline{I}$	4.7	7.8	

＊ $P<.05$,　＊＊ $P<.01$

表21　場面19における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A%	1.6	91.4	＊＊
I－A%	98.4	8.6	＊＊
M－A%	0	0	
O－D%	0	0	
E－D%	34.4	96.9	＊＊
N－P%	65.6	3.1	＊＊

＊＊ $P<.01$

応水準は自責的方向に集中するが，評点因子を見るとそれは自責固執反応ｉと自罰反応Ｉにまたがる。子どもの立場から母親に望ましい応答と感じさせるのは，Ｉ反応のように「ごめんなさい」と素直に謝るか，ｉ反応のように「もうしません」「今度から気をつけます」と以後の自発的努力を決意して母親に伝達する言葉である。母親自身の期待水準がこの両反応に等しく出現（母親にとっては基本的に謝罪である）したのに対し，子どもの出現率はｉ反応に高い。これは，おそらく単に自分の行為（寝小便）を認めて「ごめんなさい」と謝るだけでは許されない母親像の現実を，子どもは十分に認識しているのかも知れないのである。

一方，子どもが認める母親が期待しない反応水準は，他責的方向であり自我防衛型である。それは「ガミガミ言わなくてもいいでしょ」「すぐ怒る」というＥ反応，「僕じゃないよ」というＥ反応であり，いわゆる無礼な言語反応だけでなく，行為否定（超自我因子Ｅ）や「だって――」という言い訳（超自我因子Ｉ）も母親には好まれないとする。母親の期待水準が非期待水準の結果からも裏付けされることは明らかである。なお母親自身の反応水準では「何も言わない」「泣く」「いじける」といったいわば消極的態度が否定されていたが，子どもは何かを言明することが母親に望まれない原因と考えるらしく，ここではその種の記述は認められなかった。

場面23

場面23は自我阻害場面で，母親が「おつゆが冷めてしまった」ことを子どもに詫びている場面である。**表22**は評点因子の出現率を，**表23**は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する子どもから見た母親の期待水準は，評点因子別では「いいのよ，冷めたくても」の無責逡巡反応Ｍ′，「お母さん，いいよ」の無罰反応Ｍ，「温いと飲めないものね」「冷めたいのが好き」の自責逡巡反応Ｉ′に比較的高い比率が集まる。しかし，これは母親自身の期待水準と同様に特定の評点因子に大きく集中しなかった。ところが分散した反応の傾向は，たとえば母親自身ではｅ反応，Ｉ′反応，ｉ反応，Ｍ反応に分かれる結果であり，「も

表22　場面23における評点因子の出現率

（％）

評点因子	期待水準	非期待水準	有意差
E′	0	15.6	＊＊
E	0.8	33.6	＊＊
e	0	50.8	＊＊
I′	18.8	0	＊＊
I	3.1	0	
i	6.3	0	＊
M′	39.0	0	＊＊
M	25.0	0	＊＊
m	7.0	0	＊

＊ $P<.05$,　＊＊ $P<.01$

表23　場面23における評点カテゴリーの出現率（％）

評点カテゴリー	期待水準	非期待水準	有意差
E－A％	0.8	100.0	＊＊
I－A％	28.2	0	＊＊
M－A％	71.0	0	＊＊
O－D％	57.8	15.6	＊＊
E－D％	28.9	33.6	
N－P％	13.3	50.8	＊＊

＊＊ $P<.01$

う１度あたためて下さい」のような形をとるｅ反応について言えば，子どもの言語反応には全く生起しないのである。他の場面にも存在しない事実だが，何らかの解決を母親に強要する方略は，少なくとも子ども自身は現実の母親像と一致していないと言えるのである。M′反応やM反応が幾分母親自身よりも高率なのは，おそらく子どもは欲求不満を抑えることが解決方法として最良であり，またそのような形で慰めてもらいたい母親像を描いたからであろう。

一方，これは極めて特徴的と言えるが，子どもが認める母親の非期待水準は，その総てが他責的方向で占められた。「作り直してよ」「早くあたためてよ」のｅ反応，「こんな冷たいの飲めるか」「気が利かないね」のＥ反応，「冷めたい」「おいしくない」のＥ′反応の順に比率が変化するが，ｅ反応とＥ反応は母親自身の水準と逆転している。今ひとつの特徴点を挙げれば，先に記述したように母親自身の期待水準にｅ反応が認められるのに対し，子どもはそのような役割を投影しないのである。母親自身は自分への非難・攻撃を回避する傾向を持つが，子どもは母親への強要や依頼，依存をそれ以上に拒否するという立場をとっているのである。

要　　約

本研究は，Rosenzweig のＰ－Ｆスタディ児童用の中から選択された母―子場面を材料に，小学校６年生の児童64名に対して，反応の水準を子どもに対する役割期待という観点から２方向に求めた。すなわち，子ども自身の立場から捉えた欲求不満解決行動における母親が期待する反応水準，母親が期待しない反応水準である。これは筆者が以前に発表した「Ｐ－Ｆスタディ母―子場面における母親の期待水準」に関する研究を補うものである。得られた主要な結果は以下の通りである。

⑴　Ｐ－Ｆスタディ児童用に，10種の母―子場面が認められた。

⑵　母―子場面全体で出現し易い評点因子は，子どもから捉えた母親の期待水準では，M，Ｉ，M′，母親の非期待水準ではＥ，ｅ，Ｅ′などであった。

⑶　母―子場面全体で出現し易い評点カテゴリーは，子どもから捉えた母親の期待水準ではＭ－Ａ，Ｉ－Ａ，母親の非期待水準ではＥ－Ａ，Ｅ－Ｄであった。

⑷　母―子の個々の場面における子どもから捉えた母親の期待水準と非期待水準に出現する評点因子および評点カテゴリーの比率は，それぞれの場面ごとに特徴的な値を示した。

このような諸結果から，子ども自身が描く母親像として，概して母親に好まれる方向は無責的あるいは自責的方向（型は３方向に分散），概して母親に好まれない方向は他責的方向で自我防衛型であることが明らかになった。こうした具体的事実は，Ｐ－Ｆスタディによるパーソナリティの理解，さらに母子関係の臨床的解釈において重要な知見を提供するものと思われる。今後は，Ｐ－Ｆスタディ児童用の母―子場面を基準にした母子関係指標を構築して行きたいと考えている。

引用文献

阿部洋子　1987　フラストレーション場面におけるコミュニケーションに関する一研究　日本女子大学文学部紀要，36，79-87.

藤田主一・高橋秀和　1984　Ｐ－Ｆスタディの基礎的過程に関する研究　日本教育心理学会第26回総会発表論文集，454-455.

藤田主一　1986　Ｐ－Ｆスタディ母―子場面における母親の期待水準に関する比較研究　城西大学女子短期大学部紀要，3，1，57-70.

原野広太郎・江川玟成・渡辺三枝子　1970　Ｐ－Ｆスタディによる児童の教師観の研究　相談学研究，4，1，1-7.

秦　一士　1974　Ｐ－Ｆスタディにおける児童の人物認知と言語反応の関係　日本心理学会第38回大会発表論文集，510-511.

秦　一士　1987　日本におけるＰ－Ｆ Study の研究―文献目録―　甲南女子大学人間科学年報，12，73-92.

林　勝造・一谷　彊・小嶋秀夫　1963　親に対する子どもの認知像の検査法―ＣＣＰ解説―　大成出版.

久芳忠俊　1959　母親―子供罰場面における攻撃的方向と型について　心理学評論，3，74-84.

伊藤　進　1979　子供の反応についての母親の予測―ＰＦＴを用いた分析―　日本心理学会第43回大会発表論文集741.

住田勝美・林　勝造・一谷　彊　1964　ローゼンツァィク人格理論　三京房.

住田勝美・林　勝造・一谷　彊ほか　1987　Ｐ－Ｆスタディ解説―1987年版―　三京房.

高橋秀和・藤田主一　1985　Ｐ－Ｆスタディの場面展開性に関する研究―(3)児童用場面５，場面13の分析，(4)児童用場面６，場面８の分析―　日本心理学会第49回大会発表論文集，441-442.